

## 馬の離乳について

昨年2月に入社し、現在浦河の荻伏診療所に勤務しています、和智荘平（わち そうへい）です。よろしくお願ひ致します。今回は馬の離乳について書かせていただきます。

母馬・仔馬に訪れる一大イベントである離乳ですが、生産者の皆様はどのようにして離乳の時期を決定していますでしょうか。離乳の目的は、お腹の中の胎子成長のための母体の十分な栄養確保、及び母乳分泌機能の一定期間の休養により、次の出産に備えることであるといわれています。

仔馬に関しては生後4ヶ月～6ヶ月齢で離乳すると成長に差がないことが報告されています。離乳のストレスによる体重減少を最小限にとどめ、病気や事故の発生を防止するためには、極端な早期離乳は避けたほうがよいと思います。これらに加え気候や放牧環境を考慮すると北海道では9月～10月に離乳するのが理想的だと考えられます。

離乳方法は仔馬へのストレスを可能な限り軽減できるような方法が良いです。一例として段階的に複数頭ずつ母馬を仔馬から離していく方法を紹介させていただきます。

放牧している母子を一斉に離した場合、仔馬達はパニックになり、ケガをするリスクが高くなります。このような事故を回避するために保母役（当年に子のいない穏やかな性格の牝馬）の成馬を加えた状態で母馬を段階的に離していく方法です。こうすることで、群の中で離乳のしていない母子や以前に離乳した仔馬が平常でいられるので、離乳された仔馬はパニックになりにくいと考えられます。どの母馬から離していくかはその仔馬の月齢や成長速度から判断するとよいと思います。最終的に保母役の牝馬と仔馬の群となり（写真1）、仔馬が母馬のいない状態で放牧に適応できていると判断されたタイミングで保

荻伏診療所 和智 荘平

母役の牝馬を離すことで離乳は完了します。



写真1:保母役の牝馬(芦毛)と離乳された仔馬

最後に、離乳後の注意点です。ストレスがかかる仔馬の健康状態（特にローソニア感染症）に注意することはもちろんですが、母馬の乳房炎（写真2）にも注意が必要です。運動量が確保できない母馬は発症し易くなります。症状としては、発熱や乳管から膿性乳汁の排出、乳房が張り触ると嫌がる、また腫れている側の後肢の歩様がおかしくなるなどです。発症した場合には、抗生剤や痛み止めの投与などの治療が必要になります。

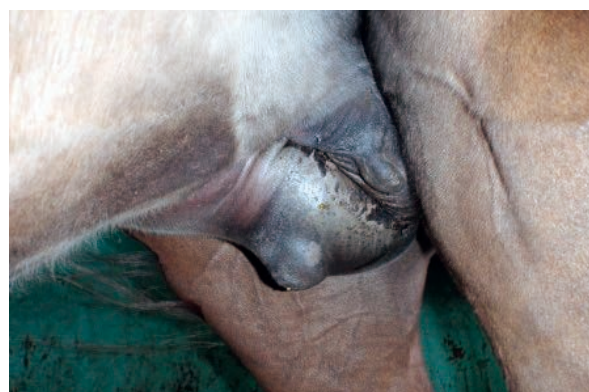


写真2:右側の乳房炎発症馬（JRA日高育成日誌より抜粋）

今回、離乳の方法について書かせていただきましたが、生産者の皆様には様々な事情で離乳の時期を決定すると思われれます。今回の話をもとに皆様各々の離乳方法を見つけていただけましたら幸いです。最後までお読みいただき、ありがとうございます。